

11

### 元崇仁小学校の出土品

素材 | 鉄などの複合物

元崇仁小学校の校舎内に穴を掘るプロジェクト「アナ☆ボル」において出土したモノ。

「アナ☆ボル」は、校舎の中の小さな部屋の床にアナを開け、地下に向かって掘り進んでいます。この無根拠なフルマイを、我々は「建設」ではなく「解放・運動」と捉え「アナーキテクチャー」と呼んでいます。(アナ・ボルとは、大正期のアナーキスト・ボルシェビキ論争で、総称として使われたコトバです) — プロジェクトメンバー (高橋悟+倉智敬子、杉山雅之、畑中英二)

テーマ《社会》「Far Away/So Close: 開かれた共同体」(2017年度)

12

### "We are between the Sun and the Earth"——太陽と地球のあいだで

素材 | 太陽光で感光したサイアノタイプの布

取り壊しが決まっている校舎の影を日光写真におさめる杉山雅之によるワークショップ。

京都芸大の移転先である元崇仁小学校内で、残したいと思う影を探してサイアノタイプといういわゆる青写真に残す。取り壊されることとなった校舎の影を、日光写真で採集。校舎が取り壊されて、更地になってしまうと影もなくなります。影も形もないという状況の一手手前で、影の形を留めるといふささやかな保存の行為。 — 杉山雅之

テーマ《社会》「Far Away/So Close: 開かれた共同体」(2017年度)

13

### 《冬景図(伝 徽宗) 模本》

作年 | 明治時代 作者 | 不詳 収蔵年 | 1899年 原本所蔵先 | 南禅寺金地院、京都

中国の南宋時代に描かれた《冬景図》が明治時代に模写され、本学芸術資料館に収蔵されたもの。

テーマ《物質》「うつしから学ぶ」(2017年度)

14

### 《代表的日本人》(2016-17年) 高橋悟

素材 | FRP、アルミ箔

京都芸大の移転先である元崇仁小学校にある二宮金次郎の石像をかたどり、それにアルミ箔を貼り付けたもの。台座から降りた少年像は漂流を続ける。

今回の試みは「制度の時間」から外れた先行移転でもある。それはまた同時に、管理の網の目から、大地を解放する無目的な運動でもある。それは安全な更地の上に立ち上がる建築への「対位法」となるだろう。「人の世に熱あれ、人間に光あれ」 — 高橋悟

テーマ《社会》「Far Away/So Close: 開かれた共同体」(2017年度)

## ▼ テーマ《生命》ドキュメント映像

### 『Tracing Life: 生存の技法』

時間 | 11分24秒 制作年 | 2016年 PD | 高橋悟 撮影・編集 | 宮永亮

ヒップホップ MC の Shing02 を講師に迎え、福祉施設「たんぼぼの家」を利用するメンバーやスタッフをふくむ受講生と共に行ったワークショップの記録映像。

言葉によるコミュニケーションが難しいと思われている方々とヒップホップとの新鮮な出会いは、対話やコミュニケーションというよりは、異なる感性、時間の感覚が織りなす「生の縫れ」の現場となった。

テーマ《生命》「Tracing Life: 生存の技法」(2016年度)

### 『Tracing Voices』

時間 | 10分44秒 制作年 | 2017年 PD・撮影・編集 | 高橋悟

感性と思考のリズムが異なる人々による「新しいコミュニケーション」の実験的な記録映画。主役は、安田真隆、水田篤記という18歳と20歳の若者。

ここでのコミュニケーションには、失敗も成功もなく、ミスコミュニケーション、ディスコミュニケーション、対立、放置も含んだ集団行為である。それは、作品を他者や環境とつながる当事者たちの「生の文脈」として捉えることにつながる。

テーマ《生命》「Tracing Voices: ラップ×ケア×アート」(2017年度)

### 『Case By Case By Good Job!』

時間 | 21分12秒 制作年 | 2018年 PD・撮影・編集 | 高橋悟

生きるための条件が異なる人たちが、コトバをつくり、リズムにのせ、声を出して発表するまでの記録とインタビューをまとめた映画。

環境から集団の身体へという「外部からのベクトル」をテーマとした contact Gonzo とのワークショップをふまえて、ここでは個のコトバからコミュニティへという「内部からのベクトル」でアプローチする。そこから仕事をしつつ遊ぶような新しい場所と複数の主体による協働性が生まれる場の提案につながった。

テーマ《生命》「キョリの演出」×「マネジメント」(2018年度)

### 『状況のアーキテクチャー パフォーマンス公演』

時間 | 16分13秒 制作年 | 2018年 PD | 高橋悟 撮影・編集 | 岸本康

異色のパフォーマンス集団 contact Gonzo とヒップホップ MC の Shing02 がケアのフィールドへと越境し、オルタナティブな働き方を視野に障害のある人たちと行った協働パフォーマンスの記録映画。

本公演では、2018年の4月から始められた contact Gonzo による身体ワークショップ「CONTACT ZONE」と Shing02 によるコトバと声とのワークショップ「Case By Case」という2つのベクトルが交差するフィールドを探索する。建築家の大西麻貴+百田有希/o+h が設計した障害ある人がはたらく福祉施設 (Good Job! センター香芝) を舞台とするパフォーマンスは、美術館や舞台とは異なり「観る」「観られる」「見る」「看られる」というボーダーを問い直す実験的な試みとなった。

テーマ《生命》「キョリの演出」×「マネジメント」(2018年度)

京都市立芸術大学主催

拡張された場におけるアートマネジメント人材育成事業

# 状況のアーキテクチャー展

## SITUATION DESIGN 2016-2019

主催：京都市立芸術大学

助成：平成30年度文化庁「大学における文化芸術推進事業」

事業統括：高橋悟 (美術家/京都市立芸術大学美術学部教授)

プロジェクトリーダー：

佐藤知久 (京都市立芸術大学芸術資源研究センター専任研究員/准教授)

高橋悟

藤田瑞穂 (京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA 学芸員)

プログラムコーディネーター：岸本光大、熊野陽平、中田有美

シニアプログラムコーディネーター：西尾咲子

SE：二瓶晃、人長果月

会場設営：石黒健一、熊谷卓哉、川田知志、蟹恒太郎

京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

# 2019.1.12(土) - 2.11(月・祝)

月曜休館 \*1月14日(月・祝)、2月11日(月・祝)は開館、1月15日(火)は休館

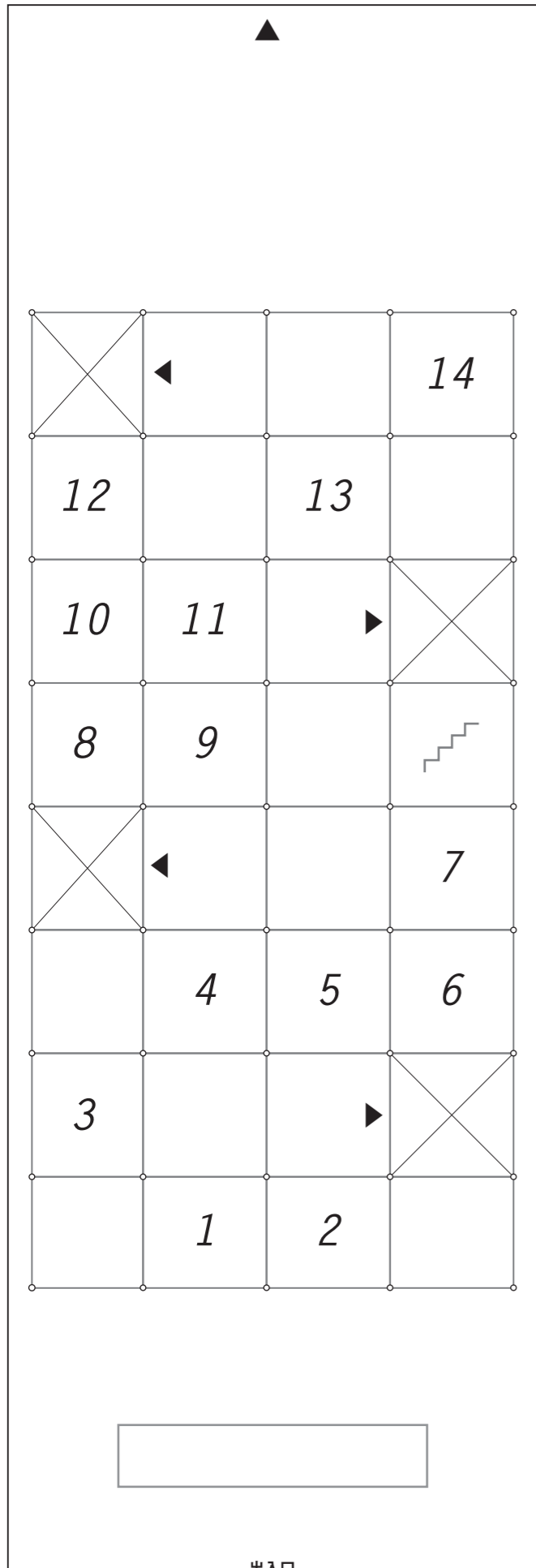
活動記録集PDF  
ダウンロード



2016年度 (8.3MB)



2017年度 (11.1MB)



☒: 立入禁止 ▼: テーマ《生命》ドキュメント映像

## 1 アフガニスタンの銅製やかん

素材|銅 収集地|カズニ 収集年|1973年 京都市立芸術大学芸術資料館蔵

本学教員が「彫刻・工芸における地中海・オリエント意匠の東漸に関する調査」の一環として中近東を横断した際に購入し、その後「アフガニスタン民族資料」として本学芸術資料館に収蔵された品々のうちのひとつ。

領域横断的な「リサーチの手法」や「キュレーション」の可能性について対話しながら、芸術と人類学の間領域にアーカイブされた物質的資料の創造的な活用方法を探求する。2018年2月-3月には、本学芸術資料館収蔵品を新たな解釈と独自の視点で捉え直す「移動する物質——十字路口としてのアフガニスタン」の展覧会を受講者自らで構想し実現した。

テーマ《物質》「物質+感覚民族誌」(2017年度)

## 2 茶碗と茶筴

[茶碗] 素材|土、釉薬 制作者|森野嘉光 制作年|不詳

[茶筴] 素材|竹

京都市内の伝統的様式の茶室でのワークショップで実際に使われた茶碗と茶筴。茶道と煎茶道の双方を体験し、それぞれにおける演出の技法や重要な要素について考察しました。

芸術や人類学、宇宙物理学、伝統芸能、茶道など多様な分野の専門家の視点を交えて、茶会という共有空間における「モノの演出」の場を参照しつつ、既存の展示空間での静観的な作品展示や鑑賞のあり方とは異なるモノの提示方法や、モノにまつわる人たちとの出会いと対話の場を演出する技法を探求する。

テーマ《物質》「モノの演出」×「リサーチ」(2018年度)

## 3 《キコエナイヨキク》(2017年) 倉智敬子

素材|樹脂粘土、イヤホン、ケーブル、溶岩石

「still moving 2017: 距離へのパトス——far away/so close」 展覧作品

元崇仁小学校 更衣室 (北館1階) にて展示

「黒き大地をやぶりにて出ぬ」というコトバから崇仁小学校の校歌は始まります。そこに子供たちへ受け渡すべき歴史への思いが込められているのでしょうか。2023年の京都市立芸術大学の移転先となった校舎は、今から1年後には取り壊されます。「いまここ」にありながら「何処にもない」キコエナイをキクというかたちは残るのでしょうか。

聞こえない音、声などを聞く耳を作りたいと思ってからの3作目となります。

日頃、街中の音楽や不要なアナウンスで聞こえにくくなっている風の音や、取り壊されてゆく建物の音。昔、日常的に聞こえていたであろう音、声を聞くことはできません。日々交わされている会話、話していたと思っていた言葉にも、常に過不足があります。元崇仁小学校で穴を掘っていた時、この土地の歴史や、この小学校で交わされていた会話、足音に耳を傾けたいと思いました。何処でも音が流れるのが普通になって今日、その聞こえてくる音たちと同じに、耳には聞こえてこない音、メッセージを感じとる為の装置になればと思います。 — 倉智敬子

テーマ《社会》「Far Away/So Close: 開かれた共同体」(2017年度)

## 4 顕微鏡

元崇仁小学校の理科室で使用されていたモノ。

大学と崇仁地域との間を中心にモノ・ヒト・コトの「移動」を軸とする実験として、同時多発的にワークショップ、フィールドワーク、さまざまなモノの運搬、研究会、実験、パフォーマンスなどを行う。

テーマ《社会》「Far Away/So Close: 開かれた共同体」(2017年度)

## 5 パプアニューギニアの仮面

素材|木、貝、籐、羽毛、粘土、彩色 収集地|セビック河中流地方タムバナム

収集年|1969年 京都市立芸術大学芸術資料館蔵

本学の美術調査隊がパプアニューギニアのセビック河沿岸で調査を行った際に収集し、その後「ニューギニア民族資料」として本学芸術資料館に収蔵された品々のうちのひとつ。

パプアニューギニアの民族資料を用いた展覧会「移動する物質——ニューギニア民族資料」にて、レクチャーシリーズを実施。芸術資料を「感覚民族誌」の視点から再検証することで、ヒトの生活の文脈に根ざした「リサーチとキュレーションの在り方」について探求した。

テーマ《物質》「物質+感覚民族誌」(2017年度)

## 6 「移動する物質——ニューギニア民族資料」 出展映像 (3分53秒)

制作年|2017年 映像撮影・編集|松見拓也 音楽|「マリアンム」(割れ目太鼓の二重奏) イアトモイの人々\*

\* 山田陽一 (録音/解説/写真) 『地球の音楽 42 パプアニューギニア 鳥のうた セビック川流域の村から (CD付)』(日本ビクター/ビクター音楽産業) 1992年

本学の美術調査隊がパプアニューギニアで1969年に収集した資料を、収蔵庫から展示会場まで運送するプロセスを、収蔵品と運送者それぞれの視点から撮影しました。

大学が有する多岐に渡る資料体(作品・楽譜・文献・資料)の「創造的な活用方法」を探り、ジャンルを超えたモノの見方や新たな価値を創出するべく、本学芸術資料館の収蔵品であるニューギニアの民族資料に着目し、収蔵品の「物質」としての「移動」について考察する。

テーマ《物質》「物質+感覚民族誌」(2017年度)

## 7 ワークショップ「DEMO DEPO」

デモロボット 制作年|2018年

障害のある人が働く施設「Good Job! センター香芝」にて、メンバーがデモを行うためのロボットを制作しました。

〈各デモロボット名称〉

(奥・左から)

「グッドジョブセンター休憩取れデモデポ」山本陽菜乃/「全部やりたくない!!」鈴木綾乃/「パソコンのしごとしたいデモ」山中ひとみ/「雨が一日ふってくるからうざい、大きな声でしゃべるのがうざい、雨の中で話されるつとめっちゃう困まる。」平田知聖/「ニコニコで仲よし」高谷菜々美

(手前・左から)

「みんなの道」小林竜汰/「夜はちゃんとねたいでも」得田育宏/「信号無視のデモデポ」山本陽菜乃

「集団でのコミュニケーションや他者との相互作用」の視点からアプローチし、実験的なパフォーマンスやワークショップを展開。障害のある人の創作活動を当事者の「生の文脈」に接続するアート活動として捉え直すべく、障害のある人と介護者、家族、環境との豊かな「身体相互作用」を生み出す場の演出を試みる。

テーマ《生命》「キョリの演出」×「マネジメント」(2018年度)

## 8 猿鳴岩

素材|FRP

山水画「冬景図」に応えるジオラマとしての岩。

我居北海君南海、寄雁伝書謝不能。(中略) 想得讀書頭已白、隔溪猿哭瘴溪藤。

——北宋・黄庭堅「寄黄幾復」

「冬景図」には小さな猿が描かれています。中国の詩では古来、猿の鳴き声はもの寂しく、旅愁をかきたてるものとして詠まれてきました。宋の皇帝や文人たちは、よく見れば何か仕掛けのあるものが描いてあると知って山水画を鑑賞していたのかもしれない。さらには、そのようなイメージの連環のなかで新たな詩を詠んだのでしょうか。

テーマ《物質》「うつしから学ぶ」(2017年度)

## 9 バッタ

受講生のガブリエ・バロンタンが行った路上実験「クレープ屋台」にて、手作りのクレープと交換された「お話」や「モノ」のうちのひとつ。

京都市立芸術大学移転整備コンセプト「terrace」を持ち運び可能な形で実現しようとするプロジェクト。荷台付き三輪車とともに街へ出て、公共圏に共有空間を作り出すいくつかの路上実験を試みた。

テーマ《社会》「Moving Terrace Works」(2017年度)

## 10 崇仁地域ドキュメント制作経過記録 (6分52秒)

制作年|2018年

崇仁保育所で子どもたちと行った日光写真採集の様子と、地域のドキュメント制作の経過を記録した写真によるスライドショー。

大学移転にともなって変化していく街の様子や、地域に住む人々の記憶を、参加者がそれぞれの視点で捉える。それらの記録を1冊の本に編集し、2019年3月に刊行する予定。

テーマ《社会》「記憶の演出」×「記録」(2018年度)